

令和5年度 日立市教育研究会先進校等調査研修報告書

日立市立田尻小学校 教諭 萩原 真也

- 1 派遣期日 令和5年10月6日（金） ～ 10月7日（土）
- 2 派遣先 学校名（会場名）横浜国立大学教育学部附属鎌倉小中学校
所在地 神奈川県鎌倉市雪ノ下 3-5-10
<https://www.kamakurasho.ynu.ac.jp/>
- 3 研修内容
 - 1日目 公開授業① 小学4年 理科 「水の変身」
公開授業② 中学1年 理科 「身のまわりの物質～水溶液と状態変化～」
協議会① 小学4年 理科
協議会② 中学1年 理科
講演会 玉川大学客員教授 笠原 陽子 先生
 - 2日目 公開授業① 小学3年 総合 「めざせ！キャンプ名人！！ 探究課題「キャンプの面白さや工夫と生活の発展」」
公開授業② 小学6年 算数 「角柱と円柱の体積 ICTを使った個別⇄協働の往還・3Dプリンターを使った見方・考え方」
協議会 小学6年 算数
講演会 上智大学教授 奈須 正裕 先生

4 感想

今回、研修先を選ぶにあたり、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の研究をしていることを重視した。県の学校教育指導方針や日立の学校教育で、上記のフレーズが掲載されており、より深く理解したいと考えたからである。横浜国立大学教育学部附属鎌倉小中学校では、個別最適な学びと協働的な学びの第一人者である奈須正裕氏の講演が予定されており、実際に話を伺う機会があるとのことで、研修先を決定した。

鎌倉小中学校では、「自己実現と共生を軸に据えた教育課程の創造～生活に生きる力の育成を目指した授業デザイン～」という研究テーマを掲げている。また、この構想の根幹を担う考えとして「子どもは生まれながらにして有能な学び手である」という子ども観を設定している。「子どもはもともと有能な学び手である」という文言は、奈須正裕氏の著書に頻出する言葉であり、奈須氏の考えを取り入れて研究していることが分かる。鎌倉小中学校では、この構想を樹木のイメージ図に表しており、幹となる部分には「生活場面（総合的な学習の時間・生活科）」、枝葉の部分には各教科が位置付けられている。総合的な学習の時間や生活科を中心に、各教科と横断的に学習することで、実生活場面に関わる探究的な学びを充実させることをねらいとしている。

公開授業で印象に残ったのは、小学6年生の算数と小学3年の総合的な学習の時間である。

6年生の算数では、ロイロノートを活用した授業を見ることができた。板書はなく、授業開始から最後までロイロノート内で完結していた。複合図形の体積を求めるにあたり、導入の段階で、教師が作成した物語調の問題が提示された。単元を通して、教師オリジナルのキャラクターが問題の場面に遭遇する展開になっている。問題への抵抗が減り、子どもたちは楽しみながら問題を解いていた。ストーリーを考えるのは大変そうだと感じたが、実生活との結びつきを意識できるため、有効な手立てだと感じた。その後は、グループで交流⇒全体で確認⇒適用問題を1問⇒振り返り、という展開で授業は進んだ。子どもたちは、話し合いの仕方や授業の流れに慣れている様子で、教師の指示がなくても次の活動に移っていた。話し合い活動は活発に行われていたため、協働的な学びという点では実現されていたように感じた。一方で、個別最適な学びという点では、個人ごとに課題が用意されていたり、自己選択する場があったりし

た訳ではなかったため、期待した場面を見ることはできなかった。授業全体の流れは非常にスムーズで、子どもたちも熱心に取り組んでいたが、「主体的か」と問われると疑問が残った。自走はしていたが、授業の流れの通りに走っているのであって、自分で進むべき場所を目指しているわけではない様子だった。この点に関しては、協議会で授業者に質問した。明確な回答は得られなかったが、鎌倉小内に「単元内自由進度学習」を実践している先生がおり、その先生から直接話を伺うことができた。単元内自由進度学習は、奈須氏の著書内でも紹介されている授業形態である。子どもたちに、必ず取り組む課題や発展課題、評価基準等を公開し、どの課題から取り組むか誰と取り組むかは児童が選択できるようになっている。その鎌倉小の先生の実践では、これに加えて学ぶ場所も選択できるようにしてあるとのことであった。学びに向かえない児童をどう支援するかなどの課題はあるようだが、子どもたちは生き生きと学習に取り組んでいるようだった。

3年生の総合的な学習の時間では、個別最適な学びと協働的な学びの瞬間を見ることができた。「キャンプ」をテーマに、年間を通した具体的な行事計画と各教科の学びを生かす計画が立てられていた。年に2回宿泊学習が計画されており、子どもたちは、料理や火起こし、アクティビティなどのテーマを選んで、宿泊に向けて準備を進めているとのことだった。授業の始めには、この時間の個人のめあてを Google スライドで共有していた。「効率的な火起こし」をテーマに掲げている児童は、めあてが決まるなり、1Fの教室から1人で中庭に出て、火起こしの練習を始めた。中々大胆な行動に驚いたが、火起こしをテーマにした児童らがその後も次々と中庭で火を起こし始めた。安全管理の不安がよぎったが、子どもたちは真剣そのものであった。「風がふいて新聞紙が動いてしまう」⇒「石で押さえよう」、「火がすぐに消えてしまう」⇒「紙から木に火を移そう」、「うまくいっている友達がいる」⇒「聞きに行ってみよう」といったように、子どもたちは自ら考え判断し、学習していた。児童同士の話し合いは、設定されたものではなく、「必要だから聞く」という自然なきっかけで会話が生まれていた。何より、子どもたちの目が生き生きとしていることが印象的であった。また、火を着ける際に着火剤を使っている児童もいれば、理科で学んだことを生かして、新聞の黒いインクの部分を目掛けてルーペで日光を集めている児童もいた。総合的な学習の時間が、理科の学びを生かす場になっている様子を見ることができた。

奈須正裕氏の講演では、著書の内容をより具体的に知ることができた。「子どもはもともと有能でやりたがりだし、知りたがり。だから学ぶ環境を整えてあげるのが大事。」という言葉は特に心に残った。単元内自由進度学習についても、実際にうまくいっている授業の動画や使用したワークシートを見ることができた。具体的なゴールの姿を見ることができたので、今回の研修の目的を果たすことができた。

研修後、早速算数と理科で単元内自由進度学習に挑戦してみた。1単元が終わるたびに試行錯誤を重ね、現在は必須課題と発展課題、評価基準、ふりかえりシートを Excel ファイルにまとめて、児童と共有している。鎌倉小の先生からあったように、学びに向かえない児童へどう支援するかが課題になっているが、多くの子どもたちは満足そうにしている。また、単元を通した準備が必要になるため、今までよりも深い教材研究をすることができるようになった。児童にとったアンケートでは、「今までは練習問題を解く時間が足りなくて、問題が解けていないのに先生の説明を聞いていたけど、自由進度学習だと自分のペースで問題を解くことができるのでうれしい。」という記述があり、教師都合で時間を区切っていたことを反省した。一方で、自由進度学習は一つの手立てであり、ねらいによってはそぐわない授業もあると感じた。昨今は、SNS や書籍で実践事例を容易に入手することができるため、私自身「とりあえずやってみる」の精神のもと、様々な方法を試していた。ただ、手段の実践が先行し、手立てが目的化しているところが私の中であった。「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」も、そのものが目的ではなく、これを通して子どもたちの資質能力を育成するという目標があることを忘れないようにしたい。

今回、先進的な授業を参観したり、第一人者の講演を聴いたりしたことで、新しい学びを得ることができた。今後は、日々の実践の中で試行錯誤を重ねていきたい。そして、この研修で学んだことを校内の先生方に紹介したり、授業で実践したりすることで、より多くの子どもたちに学びを還元できるようにしたい。